

埼玉育ちのグローバル人



田舎学生の夢「グローバル企業を創る！」

第2回 中国・トルコ・ロシアでの学生交流紀

株式会社デジタルベリー 赤羽根 康男さん



【これまで】

大学入学と同時に、生まれ育った栃木から埼玉に移り、大学一年生で初めて見た海外（アメリカ）で大きな刺激を受けた田舎学生は、「とにかくたくさん国を見てみたい」と思うようになります。アメリカ短期留学の後、タイで初めての一人旅を経験してみて、「一人旅よりも現地の人とコミュニケーションできる形の方が成長につながる」と感じ、外国人と交流しながら海外訪問をする方法を探していきました。

「中国：短期留学【20歳】」

今度はアメリカ以外の国で短期留学がしてみたいと思い、「成功する留学（中国・アジア編）」という本を買いました。中国は世界で一番人口が多い国で、中国語ができれば将来の役に立つと思ったこと、1泊約500円の格安の寮がついていたことから、北京師範大学に1ヶ月間留学することに決めました。

中国留学はアメリカ留学とは180度異なるものでした。アメリカ留学は午前中に語学学校に行くだけの遊び中心の毎日でしたが、中国留学は朝から夕方まで勉強詰めの毎日で、お陰で今でも少し中国語を話すことができます。

20年前の北京は急発展をする前の高層ビルもない街並みでしたが、市場や街には人々の熱気があふれていたし、学生はみんな勉強熱心だし、世界の10億を超える人口がいるし、「これから発展していくのだろう」と強く感じました。

この時の経験を機会に、大学での専攻分野を「中

国経済の発展」にしました。あれから20年が経ちGDPで日本を超えるほど発展しましたが、国が発展していく過程を当時肌で感じることは大変貴重な経験でした。

前職で務めていた会社では中国との取引があり、中国語を活かすことができましたし、現在の仕事でもホームページの中国語版作成などで当時の経験が役に立っています。



写真1：北京師範大学の前で（中国）



写真2：学生寮の部屋（中国）

「トルコ：国際ボランティア【21歳】」

次は留学ではない方法で海外訪問をしたいと思っ
て探したところ、「国際ボランティア」を見つけま
した。NGO 団体に連絡したところ、ボランティ
アリストの資料が送られてきました。資料には世界
数千件のリストが書かれていました。各々、英語で
行き先と内容がわずか 3 行程度しか説明されてい
なくて不安もありましたが、「TURKEY(トルコ)」

「PARK」などの文字があって、なんだか楽しそう
だったのでトルコボランティアを選びました。トル
コ南部の小さな村に世界 10 ヶ国ほどの若者が集
まり、2 週間共同生活をしながら、公園を作るとい
うものでした。国際ボランティアを軽く考えてい
た私は現地に行って様々なカルチャーショックを
受けることになりました。「公園を作る」と言っ
ても、何もない川沿いの土砂を一カ所に集めて整
えるもので、毎日 40℃の炎天下で重い石を何十往復
もして運ぶ重労働は、体力的にも精神的にも想像
を超えて大変なものでした。まさか「PARK」の文
字がここまでとは想像もしていませんでした。



写真 3：公園作りボランティア（トルコ）

この時の海外ボランティア経験はこれまでの海
外経験の中で一番大きな収穫となりました。感じ
たことは主に 2 つです。

1 つは、世界の中にはたくさん困っている人がい
ることを身をもって知れたことです。留学や一人
旅では世界の貧困は見ることはできても接するこ
とができませんでしたが、今回は毎日遊びに来て
くれる貧しい子供たちと仲良くなる中で、その子
たちが親や家が無いことを知り、日本に住む自分
がいかに恵まれていたかを知りました。将来起業

をして、世界の人が裕福になれるサービスを作り、
世界の貧しい人々に貢献していきたいと感じるよ
うになりました。

もう 1 つは、人種・宗教が違っても世界中の若者
たちが考えていることは皆同じであり、誰も戦争
は望んでいないし、お互いをきちんと話すことで
理解しあえるということです。この 2 週間は毎日
の重労働をなんとかみんなで乗り越えようという
一体感から深いコミュニケーションができていま
した。トルコの田舎村はお店もほとんどないため、
毎日ホテルでお酒を飲んで、歌って踊って、時には
議論をして、お互いを理解しあうことができました。
フランス女性と英語で恋愛の話をするとは夢
にも思いませんでしたが、それぐらいお互いを理
解しあえるようになりました。

また、小さな田舎村では外国人の若者が来てい
ること自体が珍しかったようで、新聞の取材が来
たり、村の人々が見学に来たり、スーパーマーケッ
トで声をかけてもらったりと、ちょっとした有名人
になったかのような気分を味わわせてもらいま
した。ボランティア終了後には参加者同士で 2 週
間ほどトルコ国内を旅行しました。トルコは人々
が優しくとても素晴らしい国で、どこに行っても
「ジャポンヤ？（日本人？）」と話しかけてくれる
人がいて、日本人と分かると自宅に招いてチャイ
（紅茶）をご馳走してくれました。100 年近く前に
トルコ人が遭難したときに日本人が助けてくれた
ことに恩義を感じているそうです。現在は世界情
勢の変化もあり、治安に不安がある国のイメージ
がついてしまったのが残念ですが、私にとっては
今でも訪問した国々の中で一番好きな国です。



写真 4：夜の団らん（トルコ）

「ロシア：ゼミ合宿【21歳】」

大学3年時のゼミ選択では、もっと海外情勢を学びたいと考え「国際関係コース」を選択しました。ゼミの教授は、国連（国際連合）で広報部長を務められた経験があり、テレビ朝日で放送している「朝まで生テレビ」にも定期的に出演されていた方でした。「机で学ぶよりも、実際に現地を訪問して見るのが大切」「外国人とのコミュニケーションは英語力よりも相手を理解しようとする気持ちが大切」と、国際舞台で働くための心構えを教えてくださいました。

実際に海外を見ることが大切というポリシーをお持ちの先生は、ゼミ合宿として毎年学生を海外学生交流に連れて行ってくれました。違う形の海外訪問方法を模索していた私は、「国際舞台のスペシャリストと行く海外」に興味を持ち、ロシア学生交流のゼミ合宿に参加しました。

現地の学生とともに学校に通い、現地の文化を学びました。正直、トルコやアメリカでの経験が濃すぎて、この時に学生交流で何をしたかはあまり記憶に残っていません。

それよりもゼミの先生が説明してくれた「この飛行機は世界で一番速くて、もともとは戦闘機として使われていたものだ」とか、「外国人との交流は文法を気にするよりも、大きな声で単語を連呼した方が伝わる」などの、国際舞台で戦ってきた方だからこそ聞けたお話の方が印象に残っています。

ホームステイ先での家庭では毎食ボルシチ（赤いスープ）が出てきました。余談ですが、本音でロシアの一番の印象は、女性がとても綺麗な方ばかりだったことです。同じ学生なのに、モデルのような方ばかりで何より印象的でした。



写真5：授業風景（ロシア）



写真6：緊張したロシア女性とのダンス（ロシア）

「海外経験の区切りと就職活動【21歳】」

大学3年の夏休みが終わりました。世界の国々をボランティア、短期留学、学生交流、バックパッカー人旅などの様々な形で訪問したことで、自分の中で海外を通して学んだことに一つの区切りができました。そして、自分の将来を考えた時に一番大切なのが「どのように働くか」だと思い、興味は海外から就職活動に切り替わっていきます。

特に、タイで会った先輩学生の「ベンチャーがカッコいい時代が来る」という言葉が印象的で、起業することに興味を持つようになります。「学生ビジネスコンテスト」に参加したり、ベンチャー企業経営者の話を聞いたりする中で、「将来は起業したい」という夢も持つようになりました。

就職活動は同年代ではかなり早くスタートしたと思います。色々な人と会える就職活動が楽しくてのめりこんでいき、100社以上のセミナーに参加したと思います。学内では就職活動サークルを立ち上げ、積極的に情報交換の場も作っていました。就職活動後には、埼玉大学の同学年・OBの就職活動体験記をまとめ本として出版し、学内で売ったこともあります。ちょうど昨年、現在の埼玉大学の学生さんたちが「起業サークル」を作ったと挨拶に来てくれたので、当時の就職活動体験記を見せたところ、「自分たちも作りたい」と言ってくれまし

た。20年経って当時の本が役に立つとは思わず大変嬉しかったです！

仕事人生の目標が「将来的に起業したい」「海外で働きたい」と2つできてしまったため、就職活動はベンチャー業界と商社を主に行っていました。特にベンチャー企業の説明会では、今では誰もが知る大企業に成長された会社経営者のお話を、創業当時に聞いたことは財産となりました。自分もこういう経営者になりたいと心から思いました。

一方で商社で働く先輩方にも惹かれていきました。世界を舞台に何十億、何百億を動かす商売をし、自身の言葉と体で世界中を豊かにしていく仕事を見て、こういう世界で働いてみたいと思いました。結果として、岩谷産業という商社から内定を頂き入社することにしました。2つの夢を叶えるために、海外で働いて力をつけてから起業をしようと思いました。

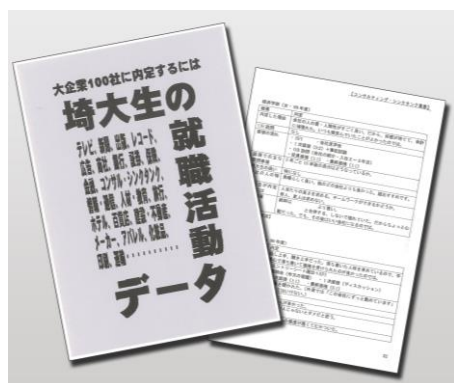


写真7：「就職活動体験記」の本

(第3回に続く)